

<牧師室から>

4月7日に緊急事態宣言が発令されてから2か月近く経とうとしています。一時期、教会のまわりも人通り、車通りの音や気配が随分と減りました。しかしこのところの感染者数減の情報、もしくは単なる“馴れ”もあってか人工的な音が元に戻りつつあるように思います。けれどもコロナ終息後、世界は元通りになるのではなく、新しく変わるのだ、という見解があります。今まで当たり前とってきたことが当たり前で通用しなくなっている今、当たり前とってきたことには、どういう意味があったのか。本当に必要だったのか…社会全体が根本から問い直されているのかも知れません。私たち教会も歴史的患難の中で福音の言葉をいただいてきました。「すべてのことは、あなたがたの益であって、恵みがますます多くの人に増し加わるにつれ、感謝が満ちあふれて、神の栄光となるのである。だから、わたしたちは落胆しない。たとえわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。なぜなら、このしばらくの軽い患難は働いて、永遠の重い栄光を、あふれるばかりにわたしたちに得させるからである。」(2コリト4:15~17) 生活環境、生活のリズム、そして生活観そのものが揺さぶられ、崩され、変えられていく途上には苦しみもあります。しかし必ずや、それらすべてが産みの苦しみとされます。創造主の栄光です。変わることはない創造主の栄光のもと、今週も共に歩みだしましょう。

<在宅礼拝にあたって>

できる限り日曜 11:00~12:00 に下記の在宅礼拝プログラムをご一緒しましょう。教会堂で共に礼拝を捧げていた時を思い起こし、励みにしていただきたいと思えます。なお難しい方には時間の都合のつく折にささげてください。

教会堂での礼拝の場合、御言葉や祈りは司会者のことば(声)を通して聞く、賛美歌は奏楽者のリードで会衆一同、歌うことによって捧げていますが、在宅の礼拝の場合は、以下を参考にして、夫々の工夫によってささげましょう。わからないことは、牧師にお尋ねください。 ☎ 048-641-9153

・「招詞」

招きのみ言葉です。

この礼拝に招かれていることを感謝し、聖書のみ言葉に聴きましょう。

・「聖書」

御言葉をゆっくり味わいましょう。音読するなどの方法もおすすりめです。

・「感謝と献金の時」

献金は、感謝と献身の表しとして捧げられるものです。1週間の出来事を思い起こしての感謝と応答の祈りをささげましょう。

・「賛美」

歌詞を読んで味わうなどでも結構です。ユーチューブに収録されている賛美に声をそろえるなどの方法も考えられます。

・「メッセージ」

「メッセージ」をお読みください。

・「祈祷」

メッセージから受けた恵みや、祈りの課題を含め示されたところを祈りましょう。

・「頌栄」

牧師の祝祷を受けることはできませんが、「ベネディクション」の賛美を通して主の祝福を受けましょう。

<在宅礼拝プログラム>

- ・招 詞 詩篇 60 篇 4 節
- ・賛 美 新生讃美歌 6 2 1 番 「われにしたがえとイエスは招く」
- ・感謝と献金の時
- ・主の祈り
- ・聖 書 使徒行伝 8 章 1 節後半～8 節 (口語訳新約聖書 193 頁)
- ・メッセージ 「散らされて行った人たち」
- ・祈 祷
- ・賛 美 新生讃美歌 3 3 8 番 「よきおとずれを語り伝え」
- ・頌 栄 新生讃美歌 6 7 9 番 「ベネディクション」
- ・黙 祷

<メッセージ>

初代教会の歴史は迫害に遭う歴史でもありました。そしてそのつど、教会は共に礼拝を捧げることが妨げられてきました。本日の聖書箇所でも今まで共に主の再臨を待ち望み、主の食卓を囲み、共にパンを分かち合ってきた仲間が散らされていきます。教会がバラバラにされていく姿と見ることもできましょう。実際、迫害者たちの狙いの一つは初代教会の集まりの解体だったと言えます。しかし主を礼拝する群れは、神さまからの一方的なみわざとして起こされていきます。「群衆はピリポの話聞き、その行っていたしるしを見て、こぞ

って彼の語ることに耳を傾けた。」(6節)

6節で、礼拝が神のしるしを共に見るところに起こされている様子がうかがえます。神のしるし、神のみわざを見て、メッセンジャーの言葉を神の言葉として受ける群れが起こされています。少し見方を変えれば、神のみわざを神のみわざとして受けるところにこそ、みことばに聴く礼拝が起こされています。どれほど不思議な現象を目の当たりにしても、神のみわざとして受けないなら礼拝の群れにはなりません。(ex.ルカ 11:14~16) だとしたらピリポの話に耳を傾けつつ、その場に神のみわざを見た者たちこそが、主を喜ぶ礼拝を主体的に見出した群れになっていったと言えましょう。(7~8節)

初代教会の困難は外からの迫害だけではなくたようです。聖書教育 p.56 にはこのような記述があります。“…「使徒たち」はなぜとどまることができたのでしょうか。当時のエルサレム教会にはけっこう大きく深刻な対立が内部にあったことが6章1~7節からうかがえます。…「ギリシャ語を話すユダヤ人」は「ヘレニスト」とも呼ばれ、…この迫害は、もっぱらこの「ヘレニスト」たちに向けられたものであり、保守派が多かった「使徒たち」はそこまで大きな危険が及びにくかったと推測できます。教会は、内部的な葛藤・分裂の危機を抱えていたのです。…”

だとしたらピリポがエルサレムを後にしたとき、はたして使徒たちとの再会など期待していたのでしょうか。ひょっとすると一人で主の再臨待望に閉じこもって終わる将来すら予想していたのではないのでしょうか。しかし当時、ユダヤ人たちと歴史的にもっとも反目しあってきたサマリヤの民と主を仰ぐ礼拝を共にすることになったのです。さらにこのサマリヤの礼拝者の群れによって、使徒たちとの再会へ導かれます。(8:14) もちろんそこには、先の聖書教育の指摘によれば使徒たちの保守的思惑が推察されはします。しかしそれでも、たとえどれほど異なる者どうしても、また外からの妨げが厳しくとも、礼拝において一つになる明日はある、それもまた神の歴史のみわざ、神の歴史のなしるしであったと言えないでしょうか。

今、私たちは新型コロナ感染により会堂礼拝など諸集會を休止せざるを得ない状況にあります。そのような状況下で、皆さんの在宅礼拝こそが、すでに神の歴史のなしるしではないのでしょうか。お互いどれほど場所は離れていても、たとえ新型コロナ感染終息が遠ざかるような事態が今後起きても、礼拝において一つになる明日を証しし続ける神の歴史のなみわざではないのでしょうか。なお初代教会最初の殉教者とされるステパノを葬った人々は(2節)、再臨の主を共に迎えることができなくなったことを悲んでいたのかも知れません。しかし死と向き合う悲しみ、苦しみは歴史的に十字架の主を共に仰ぐ礼拝に人々が招かれる道しるべとなりました。主の死は、あらゆる命を生かした主がいかなる死にも達する主になられたという神の救いのみわざ、神の救いのしるしだったのでないのでしょうか。私たちも神のしるしを共に見ましょう。まだ新型コロナ感染の治療体制が確立されているとはいえない現状においてなお、すでに、十字架の主を仰ぐ礼拝は生きる不安のただ中にある命を招く礼拝として広がっていかうとしている今を共に喜び、感謝しましょう。

<報告>

- ・日本バプテスト連盟 HP にバプテスト誌 4 月、5 月号が掲載されています。本誌が手元になくても在宅での分かち合いが可能となりました。感謝です。ぜひご活用ください。

HP アドレス https://www.bapren.jp/?joumu_cat=baptistnews

- ・日本バプテスト連盟 HP に聖書教育誌 4 月～6 月号が掲載されています。本誌が手元になくても在宅での教会学校の学びが可能となりました。感謝です。ぜひご活用ください。

HP アドレス <http://www.bapren.com/>

- ・日本バプテスト連盟宣教研究所 HP に「宣教ニュースレター」HP 限定号外、および「新型コロナウイルス感染拡大に伴うストレスに対処するための視点」が掲載されています。

HP アドレス http://senken-bap.com/category/news_letter

* 全国に出されていた緊急事態宣言の解除が始まっています。埼玉県を含む 5 都道県については継続されていますが、週明け 25 日にも解除の判断が出される可能性があります。

教会としては、当初のお知らせ通り、5 月 31 日までは会堂での礼拝を始めとする諸集会の開催を休止させていただきます。

* 5 月 31 日に予定していた定期総会は延期します。新たな開催期日は今後執事会で協議し、決定次第お知らせします。

* 5 月 25 日に解除の決定が出された場合は、執事会として 6 月以降の礼拝、諸集会再開に向けて、対応方針をしっかりと協議し、備えを整えてまいりたく思います。その内容については、改めて来週の週報でお知らせいたしますので、よろしく願いします。

* **礼拝堂での礼拝、諸集会再開の 때가近づいていることを喜び、共に主に期待いたしましょう。**